

喜撰 (六歌仙容彩の内)

へ我庵は 芝居の辰巳常盤町 しかも浮世を離れ里 へ世辞で丸  
めて浮気でこねて 小町桜の眺めに飽かぬ 彼奴にうっかり眉毛を  
読まれ へほうし／＼はきつゝきの 素見ぞめきで帰らりよか わしは  
瓢箪 浮く身ぢやけれど へ主は鯨のとり所 ぬらりくらりと今日も  
また 浮かれ浮かれて来りける へ若しやと御簾を余所乍ら 喜  
撰の花香茶の給仕 へ波立つ胸を押し撫で、しまりなけれど鉢巻  
も 幾度しめて水馴れ掉 へ濡れて見たさと手を取って 小野の夕  
立縁の時雨 へ化粧の窓に手を組んで どう見直して胴振り へ今  
日の御見の初昔 悪性と聞いて此胸が 朧の月や 松の影 へわた  
しやお前の政所 何時か果報も一森と 褒められたさの身の願ひ へ  
惚れ過ぎる程 愚痴な気に へ心の底の知れ兼ねて へぢれつたいで  
はないかいな へ何故惚れさしたコレ姉之 へうぬぼれ過ぎた悪洒  
落な へ賤が伏屋に 糸取るよりも ぬしの心が それ／＼ 取り  
にくい エさきりとは 機嫌氣づまも不断から 酔うたお客の扱ひは  
見馴れ聞き馴れ目顔で悟る 粹を通した其あとは コレひざり言  
へ粹と云はれて浮いた同士 へヤレ色の世界に出家を遂げる ヤ  
レ／＼／＼／＼ 細かにちよぼくれ へ愚僧が住家は 京の辰巳の  
世を宇治山とや 人は云ふなり ちや／＼くちやさえんの咄す濃  
い茶の 緑の橋姫 へ夕べの口舌の袖の移香 花橘の小島が崎より一  
散走りに 走つて戻れば へ内の嬢が恪気の角文字 牛も涎を 流  
る、川瀬の へ内へ戻つて我からこがる 螢を集め手管の学問 へ唐も  
日本も 里の恋路か 山吹流しの水に照り添ふ 朝日のお山に誰で  
も彼でも 二世の契りは平等院とや さりとは是はうるせいこんだに  
帰命頂礼どら如来 へここに極まる楽しさよ へ難波江の 片葉の  
芦の結ばれかゝり へヨイヤサ コレワイナ 解けてほぐれて逢ふこと  
も 待つに甲斐ある ヤンレ夏の雨 へヤアトコセ ヨイヤナア アリ  
ヤ これわいな へこのなんでもせえ へ住吉の 岸辺の茶屋に腰打  
ちかけて ヨイヤサ コレハイナ 松で釣ろやれ蛤を 逢ふて嬉しき  
ヤンレ夏の風 へヤアトコセ ヨイヤナア へアリア／＼ これわい  
ナ へ此のなんでもせえ へ姉さんおん所かえ 島田 金谷は川にあ  
ひ 旅籠はいつもお定まり へお泊りならば泊らんせ お風呂もどん  
／＼沸いている 障子も此頃張替へて 畳も此頃かへてある お寝間  
のお伽も負けにして へ草鞋の紐に仇どけの 結んだ縁の一夜妻 へあ  
んまり憎うも あるまいか へテモさうだろ／＼さうである 住吉  
様の岸の姫松めでたさよ へ来世は生を黒牡丹 己のが庵へ帰り行

く  
我が里さしてぞ急ぎ行く。